



研究論文 (Articles)

親の養育行動尺度の開発および子どもの内在化問題と 外在化問題に与える影響¹⁾

岸田 広平^{*1}・津田 征海^{*2}・福山 裕三郎^{*3}・

板東 瑞季^{*4}・佐藤 寛^{*5}・石川 信一^{*6}

(神戸大学人間発達環境学研究科^{*1}, 奈良県中央こども家庭相談センター^{*2}, 関西学院大学大学院文学研究科^{*3},
東京家政大学大学院^{*4}, 関西学院大学文学部^{*5}, 同志社大学心理学部^{*6})

Development of the Parenting Behaviors Questionnaire and its effects on internalizing and externalizing problems in children and adolescents

KISHIDA Kohei^{*1}, TSUDA Masami^{*2}, FUKUYAMA Yuzaburo^{*3},

BANDO Mizuki^{*4}, SATO Hiroshi^{*5} and ISHIKAWA Shin-ichi^{*6}

(Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University^{*1},

Nara Prefectural Central Child and Family Consultation Center^{*2}, Graduate School of Humanities,

Kwansei Gakuin University^{*3}, Graduate School, Tokyo Kasei University^{*4}, School of Humanities,

Kwansei Gakuin University^{*5}, Faculty of Psychology, Doshisha University^{*6})

Parenting behaviors are one of the main factors that related to both internalizing and externalizing problems in children and adolescents. The purpose of this study was to develop the Parenting Behaviors Questionnaire (PBQ) and to examine its effects on internalizing and externalizing problems in children and adolescents. The participants were 2,442 parents/caregivers (44.46 ± 5.95 years) who had children or adolescents from grades 1 to 9. The target children consisted of 1,168 girls and 1,274 boys. Regarding developmental stage, 1,519 were children (elementary school students) and 923 were adolescents (junior high school students). Exploratory and confirmatory factor analyses indicated that the PBQ had a seven-factor structure. The PBQ also had "Positive parenting behaviors" and "Negative parenting behaviors" as high-order factors. In addition, the reliability and test-retest reliability of the PBQ were confirmed. In addition, the construct validity of the PBQ was confirmed in relation to children's mental health and caregivers' psychological flexibility. Next, the results of hierarchical multiple regression analyses showed that, for externalizing problems, there was a weak negative effect from Positive parenting behaviors ($\beta = -.22$) and a weak positive effect from Negative parenting behaviors ($\beta = .26$). Based on the above results, the effects of positive and negative parenting behaviors on internalizing and externalizing problems were discussed.

親の養育行動は子どもの内在化問題と外在化問題の両方に関連する主な要因の1つである。本研究の目的は、親の養育行動尺度 (Parenting Behaviors Questionnaire: PBQ) を開発し、子どもの内在化・外在化問題に及ぼす影響を検討することであった。研究参加者は、小学1年生から中学3年生までの子どもを持つ2,442名の親/養育者 (44.46 ± 5.95歳) であった。対象となった子どもは、性別が女子1,168名と男子1,274名であった。発達段階については、児童 (小学生) が1,519名であり、青年 (中学生) が923名であった。探索的因子分析と確認的因子分析の結果、PBQは7因子構造が示された。また、PBQは「肯定的養育行動」と「否定的養育行動」を上位因子として有していることが示された。次に、PBQの内的整合性と再検査信頼性が確認された。加えて、子どものメンタルヘルスおよび養育者の心理的柔軟性との関連より、PBQの構成概念妥当性が確認

1) 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金 (21K13737, 24K16861) の助成を受けた。

された。次に、階層的重回帰分析の結果、外在化問題については、肯定的養育行動からの弱い負の影響 ($\beta = -.22$)、否定的養育行動からの弱い正の影響 ($\beta = .26$) が示された。以上の結果を踏まえて、肯定的養育行動と否定的養育行動が内在化問題や外在化問題に与える影響が議論された。

Key Words : parents, parenting behaviors, children and adolescents, internalizing problems, externalizing problems

キーワード：親，養育行動，子ども，内在化問題，外在化問題

問題

近年、本邦の子どもにおける内在化問題や外在化問題などの様々なメンタルヘルスに関わる問題の悪化が報告されている。内在化問題とは、不安、抑うつ、引きこもり、身体化症状など、自己の内側に向かう形で現れる心理的問題を指す。一方で、外在化問題とは、攻撃性、反抗的態度、破壊的行動、衝動性、多動など、他者や環境に対して外向きに現れる行動上の問題を指す。令和5年度の児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査（文部科学省，2024）に基づくと、不登校数、自殺、いじめの認知件数、暴力行為などのメンタルヘルスに関わる問題件数の急速な増加が報告されている。加えて、コロナ禍の不安定な登校状況においても、本邦の子どもにおける内在化問題や外在化問題のさらなる悪化が報告されている（Kishida et al., 2021）。以上のように、子どもの内在化問題や外在化問題といったメンタルヘルスの悪化は喫緊の課題であり、適切な早期支援が求められている。

子どもの内在化問題や外在化問題に関連する重要な変数として親の養育行動がある。親の養育行動には様々な分類方法が提唱されている。1つの分類方法として、親の養育行動は5つに分類できることが系統的レビューにおいて指摘されている（Pinquart, 2017a; Pinquart, 2017b）。具体的には、「行動的統制（Behavioral control）」、「温かさ（Responsiveness/warmth）」、「自律性の尊重（Autonomy granting）」、「罰的統制（Harsh control）」、「心理的統制（Psychological control）」という5つである。「行動的統制」は、適切な行動に対する明確で一貫した期待を伝えた上で、その期待に沿った子どもの行動を観察する努力を含む、一連の積極的な親の戦略としての養育行動をさす。「温かさ」は、受容的、養育的、支持的、

繊細な、温かい養育行動をさす。「自律性の尊重」は、子どもが活動や行動を選択できるようにするなど、子どもの個性的な表現や意思決定を親が奨励し、自律性を育む養育行動をさす。「罰的統制」は、身体的または言語的な罰や押しつけがましい行為などの養育行動をさす。「心理的統制」は、親が子どもの心理的体験を操作しようとする養育行動をさす。Pinquart による養育行動の分類を用いる強みは次の2点にあると考えられる。第1に、網羅的分類である点が指摘できる。系統的レビューの結果（Pinquart, 2017a; Pinquart, 2017b）、養育行動に関する1,000を超える数多くの実証的研究がこの枠組みを用いて分類されている。第2に、内在化問題や外在化問題との関連性がある。例えば、行動的統制、温かさ、自律性の尊重は内在化問題や外在化問題と弱い負の関連が示されており、反対に、罰的統制や心理的統制は内在化問題や内外在化問題と弱い正の関連が示されている（Pinquart, 2017a, 2017b）。以上のように、Pinquart の分類は、養育行動を網羅的に分類できる枠組みであり、かつ、内在化問題や外在化問題との関連を検討するために有益な分類であると言える。

現在、国内外において、多くの親の養育行動を包括的に測定する尺度や評価ツールが開発されている。例えば、海外で使用される親の養育行動尺度としては、系統的レビュー（Pinquart, 2017a, 2017b）にも数多く含まれる Alabama Parenting Questionnaire（以下、APQ とする；Essau et al., 2006）や、近年新たに開発された Multidimensional Assessment of Parenting Scale（以下、MAPS とする；Parent & Forehand, 2017）などがある。APQ は「肯定的養育」、「父親／母親の関与」、「不十分な見守り」、「体罰」、「非一貫性」を測定できる尺度である。MAPS は「敵意」、「体罰」、「緩い統制」、「応答的養育」、「正の強化」、「温かさ」、「支持性」を測定できる尺度である。両既存

尺度については信頼性と妥当性が確認されている。

次に、国内においても、親の養育行動を包括的に測定する尺度が開発されている。代表的な尺度としては、Parental Child Rearing Scale（以下、PCRSとする；松岡他，2011）やPositive and Negative Parenting Scale（以下、PNPSとする；伊藤他，2014）などがある。PCRSは、「肯定的働きかけ」、「相談・つきそい」、「叱責」、「育てにくさ」、「対応の難しさ」を測定できる尺度である。PNPSは「関与・見守り」、「肯定的応答性」、「意思の尊重」、「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責・体罰」を測定できる尺度である。さらに、PNPSは上位因子として、「肯定的養育」と「否定的養育」の2分類の存在が確認されている。両既存尺度についても信頼性と妥当性が確認されており、親の養育行動を包括的に測定する有益な尺度である。その他にも、国内のペアレント・トレーニングにおける包括的な効果指標として、ペアレント・トレーニング評価ツールが開発されている（日本発達障害ネットワーク，2023）。当該の評価ツールでは、親のストレス、ペアレント・トレーニングに基づく理解や対応、周囲のサポートへの知覚といった幅広い内容が測定され、「肯定的養育」と「否定的養育」がそれぞれ単独因子として測定できる。

以上の先行研究による既存尺度や評価ツールの特徴を踏まえると、親の養育行動については、上位因子として肯定的養育行動と否定的養育行動という大きな分類が存在し、それらの上位因子を構成する下位因子としての様々な養育行動が位置づけられると考えられる。また、各研究が想定する文化的背景や理論的背景に基づいて、親の養育行動を測定するために、既存の各尺度は十分な信頼性と妥当性を有しており、有益な効果指標であると考えられる。しかし、本邦の子どもを対象とした養育行動を測定する尺度として利用する際には、既存尺度の項目内容や下位因子においていくつかの限界が指摘できる。まず、海外の尺度（APQやMAPS）については、国内で使用するには文化的な違いによる課題が生じる可能性がある。具体的には、「タイムアウトをする（APQ）」や「キスやハグをする（MAPS）」といった日本文化には適合しにくい項目が含まれており、単純な翻訳による使用が難しい。次に、国内の既存

尺度（PCRSやPNPS）においては、先述の系統的レビュー（Pinquart, 2017a, 2017b）による枠組みと照らし合わせた場合、5つの分類の固有の影響を検討することが難しい。具体的には、PCRSやPNPSでは、「行動的統制」と「温かさ」、あるいは、「罰的統制」と「心理的統制」が同一の下位因子として抽出されている。統合された下位因子を用いた場合、各構成概念による固有の影響を検討することが難しいことが指摘できる。

本研究では、肯定的養育行動と否定的養育行動という上位因子を含み、かつ、先述の系統的レビュー（Pinquart, 2017a, 2017b）の示す5分類に基づく下位因子を含む尺度である親の養育行動尺度（Parenting Behaviors Questionnaire: 以下、PBQとする）を新たに作成し、信頼性と妥当性を検討することを目的とした。加えて、先行研究と同様の関連性を示すか検討するために、新たに作成するPBQで測定する親の養育行動が子どもの内在化問題と外在化問題に与える影響を検討することを目的とした。

方法

対象者と倫理的配慮

本研究では、子どもと親のメンタルヘルスや行動的特徴の検討することを目的としたMental health problems and Behavioral factors in Children and Adolescents (MBCA Study)のデータを中心として利用した。MBCA Studyは小学1年生から中学3年生の子どもを持つ親/保護者（20歳以上60歳以下）を対象に実施したオンライン調査であり、株式会社ドゥ・ハウスを通じて全国から対象者の募集を行った。本研究では、基本測定情報として、親の性別と年齢、子どもの性別、年齢、学年を用いた。加えて、親の養育行動を測定するParenting Behaviors Questionnaire (PBQ) 暫定版（詳細は後述）、および、子どもの内在化問題と外在化問題を測定するStrength and Difficulties Questionnaire（以下、SDQとする）を用いて分析を行った。MBCA Studyでは2022年2月（Time 1）に1回目の調査を実施し、4ヵ月後の2022年6月（Time 2）に2回目の調査を実施した。

本研究は、第1著者が研究実施時に所属していた大学の「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：21040）。インフォームドコンセントは、研究内容を画面上で説明した上で、親/保護者からの同意を得た。

加えて、PBQの構成概念妥当性の検討のためにのみ、養育者の心理的柔軟性を測定する日本語版 Parental Acceptance Questionnaire (6-PAQ: Yamada & Fujii, 2020) との相関係数を算出した。当該データは、岸田・福山 (2024) のデータの二次利用であった。

分析対象者

1回目の調査 (Time 1) に参加した2,606名のうち、欠損データを除いた2,442名 (有効回答率93.71%) が分析に含まれた。Time 1の親/保護者の特徴は、性別が母親・女性1,343名と男性・父親1,099名であった (44.46 ± 5.95 歳)。Time 1の対象となった子どもは、性別が女子1,168名と男子1,274名であった (11.20 ± 2.54 歳)。発達段階については、児童 (小学生) が1,519名であり、青年 (中学生) が923名であった。2回目の調査 (Time 2) では、回答のなかったデータおよび欠損データを除いた1,565名を解析対象とした (継続率は64.13%)。Time 2の親/保護者の特徴は、性別が母親・女性906名と男性・父親659名であった。Time 2の対象となった子どもの性別は、女子735名と男子830名であり、発達段階は、児童 (小学生) 986名と青年 (中学生) 579名であった。PBQと6-PAQの相関係数の検討に用いた対象者は、小学1年生から中学3年生の各年代200名の合計1,800名 (男子941名と女子859名) であり、平均年齢は 10.67 ± 2.63 歳であった。親の平均年齢は 43.33 ± 6.18 歳であり、父親793名と母親1,007名であった。当該データにおいて、欠損データはなかった。

測定尺度

Parenting Behaviors Questionnaire (PBQ) 暫定版 本研究では以下の手続きにより、Parenting Behaviors Questionnaire (PBQ) 暫定版の作成を行った。第1著者 (臨床心理士, 公認心理師) と第2著

者 (臨床心理系大学院生) とが協議を行い、5つの養育行動「行動的統制」、「温かさ」、「自律性の尊重」、「罰的統制」、「心理的統制」の分類に合致するよう各12項目合計60項目を予備項目として作成した。項目作成の際には、(a) Pinquartの定義や例と照らし合わせた時に、複数の分類に合致せず、いずれか1つの分類に合致する、(b) その項目が態度やパーソナリティ、認知、感情といった概念ではなく、具体的な行動を記述している、(c) 幅広い年齢層の子ども (幼児期, 児童期, 青年期) に対する親の養育行動として適用できる、という基準で作成を行った。次に、最終著者 (臨床心理士, 公認心理師, 専門行動療法士) が上記の基準に基づいて、第1著者や第2著者らとともに協議と修正を行った。最終的に、60項目が暫定版PBQの項目として用意された。各項目は4件法により回答する (「ぜんぜんない = 0」、「ときどきそうだ = 1」、「よくそうだ = 2」、「いつもそうだ = 3」)。教示は、「あなたのお子さんとの関わり方について、最もよく当てはまる項目にそれぞれ○をつけてください」とした。

日本語版 Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ) 子どものメンタルヘルスを測定するためにSDQ日本語版を用いた。SDQは親評定、教師評定、自己評定の3つがあり、本研究では親評定版を使用した。親評定版SDQの信頼性と妥当性は先行研究により確認されている (Moriwaki & Kamio, 2014)。SDQは25項目の尺度であり、5つの下位因子として、「情緒の問題」、「行為の問題」、「多動/不注意」、「仲間関係の問題」、「向社会的行動」を有している。「情緒の問題」と「仲間関係の問題」の合計得点は「内在化問題」として、「行為の問題」と「多動/不注意」の合計得点は「外在化問題」として算出する (Goodman et al., 2012)。さらに、「向社会的行動」を除く4つの下位因子の合計得点は「総合困難」として算出する。向社会的行動を除き、得点が高いほど各症状が高く不適応な状態が高いことを示している。

日本語版 Parental Acceptance Questionnaire (6-PAQ) 構成概念妥当性の検討のために、6-PAQを用いた。原版6-PAQは養育者の心理的柔軟性を測定する18項目で構成される (日本語版の信頼性と妥

当性は17項目を用いた場合に担保される)。本研究では17項目の合計得点を養育者の心理的柔軟性として用いた。心理的柔軟性は6つのプロセスから構成される(「アクセプタンス」「脱フュージョン」「今、この瞬間との接触」「文脈としての自己」「価値」「コミットされた行動」)。項目例としては、「私の親としての行為は、私自身の価値と一致している」「子育てで大切にしていることを明言できる」「私の子育ての方法は一貫している」などがある。6-PAQによって測定される心理的柔軟性は、行動的統制に関連する養育スタイル(「e.g., 私は子どもの行動の結果について説明します」)と中程度の正の相関($r = .50$)が確認されており、罰的統制に関連する養育スタイル(「e.g., 私は体罰をしつけの方法として使います」)と中程度の負の相関($r = -.46$)が確認されている(Fonseca et al., 2020)。このことから、6-PAQによって測定される養育者の心理的柔軟性は、肯定的養育行動と中程度の正の相関があり、否定的養育行動と中程度の負の相関があることが予想される。

分析計画

PBQ 暫定版の因子構造を検討するために、Time 1 のデータを用いて、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を実施した。続いて、探索的因子分析によって抽出された因子構造、および、肯定的養育行動と否定的養育行動を上位因子とした因子構造の2つのモデルについて、最尤法を用いた確認的因子分析を実施した。信頼性を検討するために、内的一貫性と再検査信頼性を算出した。再検査信頼性には、Time 1 と Time 2 のデータを用いた。次に、子どもの性別と発達段階を独立変数として、親の養育行動を従属変数として多変量分散分析を実施した。その後、各変数に対して単変量の二要因分散分析を実施した。

続いて、構成概念妥当性を検討するために、PBQ と SDQ の各下位因子と合計得点との相関係数を算出した。先行研究(伊藤他, 2014; Piquart, 2017a, 2017b)の結果に基づいて、PBQ の肯定的養育行動に関連する因子と、SDQ の「向社会的行動」において弱いから中程度の正の相関があると予想した。ま

た、PBQ の否定的養育行動に関する因子は、SDQ の「総合困難」, 「内在化問題」, 「外在化問題」と弱いから中程度の正の相関があると予想した。加えて、PBQ の肯定的養育行動と「養育者の心理的柔軟性」は弱いから中程度の正の相関があり、PBQ の否定的養育行動と「養育者の心理的柔軟性」は弱いから中程度の負の相関があると予想した。

次に、子どもの内在化・外在化問題に対する親の肯定的養育行動と否定的養育行動の横断的影響を検討するために Time 1 のデータを用いて階層的重回帰分析を実施した。内在化問題(外在化問題)を従属変数として、ステップ1に子どもの性別と発達段階、ステップ2に外在化問題(内在化問題)、ステップ3に親の養育行動を投入した(因子分析の結果を踏まえて検討)。本研究では、横断的調査(階層的重回帰分析)の標準回帰係数の基準を絶対値 .20 以上とした。分析には IBM SPSS Statistics 29.0 および IBM SPSS Amos 29.0 を用いた。

結果

探索的因子分析

最尤法・プロマックス回転を用いた探索的因子分析の結果、固有値の減衰状況(9.833, 6.598, 2.309, 1.779, 1.389, 1.061, 0.870, 0.588)から1因子から8因子構造の可能性が示された。本研究では、Piquart の5つの養育行動を基準にして項目を作成しているため、5因子から8因子を想定して、以下の5つの基準に基づいて探索的因子分析を繰り返した。具体的には、(a) 各因子が Piquart の定義や例と照らし合わせた際に解釈可能である、(b) 臨床使用可能性を考慮して全体の項目数を30項目程度とする、(c) 特定の因子に寄与する項目が多くなりすぎないように各因子の項目数を4-6項目とする、(d) 当該項目がいずれかの因子に負荷する(.40以上)、(e) 複数の因子に重複して負荷する項目を削除する(.30以上)、という5つの基準であった。

探索的因子分析の結果、7因子32項目が抽出された。抽出された各因子に含まれる項目の解釈可能性を踏まえて、各因子を命名した。第1因子5項目は行動的統制の項目を含むものの、後述する第6因子

と弁別するために「ご褒美 (Reward)」と名付けた。第2因子5項目は「温かさ (Warmth)」と名付けた。第3因子5項目は「自律性の尊重 (Autonomy granting)」と名付けた。第4因子4項目は体罰に関する「罰的統制」に合致する項目が含まれ、第5因子4項目は叱責に関連する「罰的統制」に合致する項目が含まれた。したがって、両者を区別するために、第4因子は「体罰 (Physical punishment)」, 第5因子は「叱責 (Verbal punishment)」と名付けた。第6因子5項目は、行動的統制の項目を含むものの、先述した第1因子と弁別するために「肯定的注目 (Positive attention)」と名付けた。第7因子4項目は「心理的統制 (Psychological control)」と名付けた。探索的因子分析の結果を Table 1 に示す。

確認的因子分析

次に、当該の7因子32項目を用いて、最尤法による確認的因子分析を実施した。7因子相関モデルについて検討を行った。分析の結果、 $\chi^2 = 2206$, $df = 443$, GFI = .942, AGFI = .931, CFI = .969, RMSEA = .040, AIC = 2376, BIC = 2378 という値が得られた。続いて、肯定的養育行動 (「肯定的注目」, 「ご褒美」, 「温かさ」, 「自律性の尊重」), および、否定的養育行動 (「体罰」, 「叱責」, 「心理的統制」) を上位因子として仮定し、上位因子の相関を仮定した上位因子モデルについて同様の検討を行った。

その結果、 $\chi^2 = 2557$, $df = 456$, GFI = .933, AGFI = .923, CFI = .963, RMSEA = .043, AIC = 2700, BIC = 2703 という結果が得られた。以上のことから、PBQ は7因子32項目の構造妥当性が確認され、肯定的養育行動と否定的養育行動という上位因子を仮定した構造妥当性も確認された。加えて、探索的因子分析と確認的因子分析において対象としたデータセットが同一であるという限界はあるものの、下位因子を用いた7因子相関モデルの方が、上位因子を用いた2因子相関モデルよりも当てはまりが良いことが示された。上位因子を仮定した確認的因子分析の結果を Figure 1 に示す。なお、モデルが煩雑になることを避けるため、顕在変数と測定誤差を省略して記載している。

内的整合性と再検査信頼性

内的整合性を検討した結果、下位因子には、「肯定的注目 ($\alpha = .93$)」, 「ご褒美 ($\alpha = .94$)」, 「温かさ ($\alpha = .89$)」, 「自律性の尊重 ($\alpha = .91$)」, 「体罰 ($\alpha = .89$)」, 「叱責 ($\alpha = .87$)」, 「心理的統制 ($\alpha = .85$)」という結果が得られた。続いて、上位因子には、「肯定的養育行動 ($\alpha = .94$)」, 「否定的養育行動 ($\alpha = .92$)」という結果が得られた。次に、再検査信頼性を検討した結果、「肯定的注目 ($r = .57$; ICC (1, 2) = .67)」, 「ご褒美 ($r = .55$; ICC (1, 2) = .69)」, 「温かさ ($r = .64$; ICC (1, 2) = .74)」, 「自律性の尊重 ($r = .49$; ICC (1, 2) = .64)」, 「体罰 ($r = .57$; ICC (1, 2) = .72)」, 「叱責 ($r = .61$; ICC (1, 2) = .75)」, 「心理的統制 ($r = .54$; ICC (1, 2) = .70)」という結果が得られた。続いて、「肯定的養育 ($r = .60$; ICC (1, 2) = .71)」, 「否定的養育 ($r = .61$; ICC (1, 2) = .75)」という結果が得られた。

記述統計

子どもの性別と発達段階を要因とした多変量分散分析を実施した。その結果、Wilks の Λ は、発達段階の主効果 ($\Lambda = 0.918$, $F(7, 2432) = 31.16$, $p < .001$)、性別の主効果 ($\Lambda = 0.990$, $F(7, 2432) = 3.41$, $p < .01$)、発達段階と性別の交互作用 ($\Lambda = 0.994$, $F(7, 2432) = 2.25$, $p < .05$) がそれぞれ有意であった。そこで、各従属変数について単変量分散分析を実施した (Table 2)。その結果、すべての下位因子、「肯定的養育行動」, 「否定的養育行動」において発達段階の主効果が有意であった。一方、性別の主効果は、「温かさ」は女子の方が男子よりも高いことが示された。「体罰」, 「叱責」, 「心理的統制」, 「否定的養育行動」は男子の方が女子よりも高いことが示された。最後に、発達段階と性別の交互作用は、「体罰」においてのみ有意な結果が示された。下位検定の結果、発達段階にかかわらず男子の方が女子よりも得点が高く、児童においては男子の方が女子よりも得点が高いことが示された (すべて $p < .001$)。親の養育行動尺度の下位因子および合計得点の記述統計および分散分析の結果を Table 2 に示す。

Table1 探索的因子分析の結果

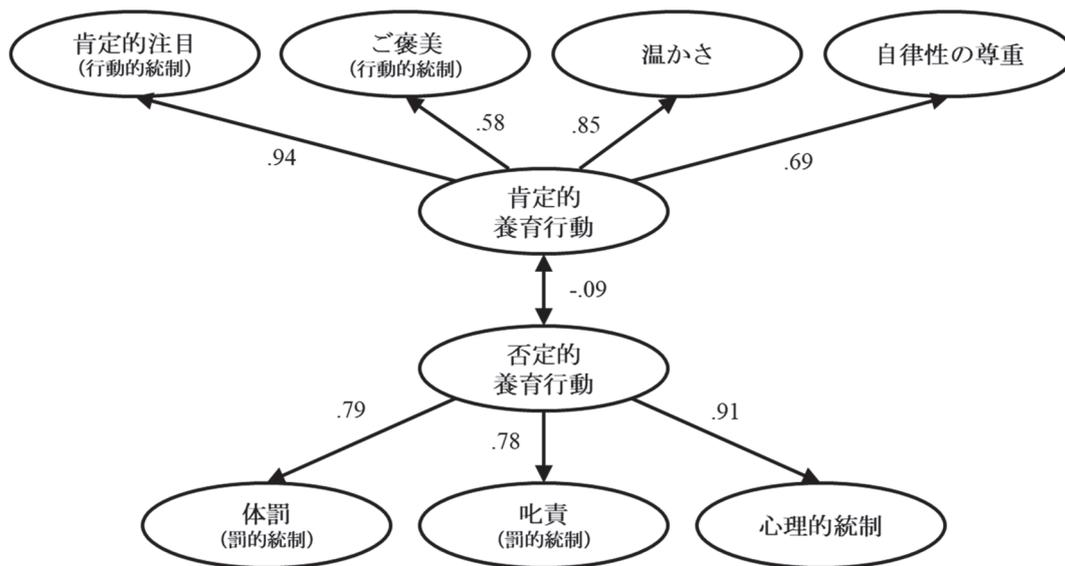
	I	II	III	IV	V	VI	VII
ご褒美（行動的統制）（ $\alpha = .94$ ）							
56 子どもが何かを成し遂げた時は、子どもの好きなご褒美をあげる	0.92						
47 子どもが良い行動をした時は、子どもが喜ぶご褒美をあげる	0.90						
38 子どもが望ましい行動をした時は、子どもの好きなご褒美をあげる	0.90						
50 子どもが何かに挑戦した時は、子どもが喜ぶご褒美をあげる	0.83						
15 子どもが何かを頑張った時は、子どもの好きなご褒美をあげる	0.82						
温かさ（ $\alpha = .89$ ）							
44 子どもと一緒に楽しいことをしている		0.82					
33 子どもと一緒によく笑う		0.80					
31 子どもとよくスキンシップをとっている		0.77					
53 子どもと一緒によく冗談を言う		0.76					
21 子どもと一緒に遊ぶ	0.11	0.71					
自律性の尊重（ $\alpha = .91$ ）							
30 子どもには自分で決めるようにと伝えている			0.91				
19 子どもが何かをする時は、自分で考えてよいと伝えている			0.88				
58 子どもに対して指図をせず、自分で考えることを許可している			0.78				
7 子どもに対して自分で判断してもよいということを伝えている			0.74				
60 子どもにはどのような行動をとるべきか自分で考えるように伝えている			0.72			0.13	
体罰（罰的統制）（ $\alpha = .89$ ）							
39 子どもが間違ったことをした時は、子どもを叩いてしまうことがある				0.88			
57 子どもが言うことを聞かない時は、子どもを軽く叩くことがある				0.83			
46 しつけの一つとして、子どもに体罰を使うことがある				0.76	-0.10		0.11
12 子どもが言うことを聞かない時は、子どもに手を出してしまうことがある				0.74			
叱責（罰的統制）（ $\alpha = .87$ ）							
16 子どもが言うことを聞かない時は、子どもを大きな声で怒ることがある					0.84		
29 子どもが言うことを聞かない時は、子どもを強い言葉で叱ることがある					0.81		0.10
4 子どもが言うことを聞かない時は、子どもに厳しいしかり方をする					0.76		
35 子どもが悪い行動をした時は、子どもを怒鳴ったり叫んだりする					0.64		0.13
肯定的注目（行動的統制）（ $\alpha = .93$ ）							
24 子どもが良い行動をした時は、すぐにその行動をほめる						0.85	
26 子どもが何かを頑張った時は、その行動を具体的にほめる		0.14				0.78	
36 子どもが頼んだことをしてくれた時は、子どもの行動を具体的にほめる						0.77	
5 子どもが望ましい行動をした時は、すぐにその行動をほめる						0.74	
59 子どもが何かに挑戦した時は、その行動を具体的にほめる			0.13			0.68	
心理的統制（ $\alpha = .85$ ）							
32 子どもが親の期待にそむいた時は、子どもに対して冷たい言葉がけをする							0.80
34 子どもが親の期待にそむいた時は、子どもにため息をついてみせることがある							0.79
45 子どもが期待外れなことをした時は、子どもにわざと嫌な表情をすることがある							0.73
14 子どもに対してわざと冷たい言葉がけをすることがある					0.19		0.51
	I	II	III	IV	V	VI	VII
I	-	0.52	0.40	0.15	0.16	0.51	0.17
II		-	0.55	-0.06	0.04	0.74	-0.07
III			-	-0.10	0.00	0.63	-0.07
IV				-	0.57	-0.16	0.68
V					-	0.04	0.65
VI						-	-0.18

注).10以下の負荷量を非表示とする。

相関係数に基づく構成概念妥当性の検討

PBQとSDQの各下位因子と合計得点に関する相関係数を算出した（Table 3）。その結果、「肯定的養育行動」は「向社会的行動」と中程度の正の相関が

示された（ $r = .45$ ）。行動的統制における「肯定的注目」は「向社会的行動」と中程度の正の相関が示されたものの（ $r = .44$ ）、「ご褒美」とは弱い正の相関が確認された（ $r = .25$ ）。加えて、「温かさ」と「向



GFI = .933, AGFI = .923, CFI = .963, RMSEA = .043

Figure1 上位因子を仮定した確認的因子分析の結果

Table2 記述統計および分散分析の結果

範囲	n	全体			児童(小学生)			青年(中学生)			主効果		交互作用	
		女子	男子	全体	女子	男子	全体	女子	男子	全体	性別	発達段階		
肯定的 養育行動	0-60	M	34.37	33.63	33.99	35.67	34.70	35.16	32.34	31.78	32.05	2.62	43.92 ***	0.18
		SD	11.45	11.38	11.42	11.02	11.12	11.08	11.83	11.58	11.70		C > A	
否定的 養育行動	0-36	M	7.95	8.94	8.47	8.44	9.66	9.08	7.20	7.72	7.46	10.53 **	35.03 ***	1.70
		SD	6.22	6.68	6.48	6.15	6.70	6.48	6.25	6.46	6.36		G < B	C > A
肯定的 注目	0-15	M	9.74	9.53	9.63	10.16	9.76	9.95	9.10	9.13	9.11	1.44	31.22 ***	1.98
		SD	3.65	3.64	3.65	3.52	3.61	3.57	3.76	3.66	3.71		C > A	
ご褒美	0-15	M	7.39	7.14	7.26	7.59	7.37	7.47	7.09	6.73	6.91	3.42	13.68 ***	0.21
		SD	3.64	3.75	3.70	3.65	3.65	3.65	3.62	3.90	3.77		C > A	
温かさ	0-15	M	9.21	8.97	9.08	9.77	9.60	9.68	8.33	7.87	8.10	4.43 *	112.74 ***	0.90
		SD	3.64	3.66	3.65	3.43	3.51	3.47	3.79	3.67	3.73		G > B	C > A
自律性の 尊重	0-15	M	8.03	8.00	8.01	8.16	7.97	8.06	7.82	8.04	7.93	0.01	1.09 ***	2.53
		SD	3.05	3.02	3.04	2.98	3.00	2.99	3.16	3.06	3.11		C > A	
体罰	0-12	M	1.55	1.91	1.74	1.63	2.13	1.89	1.43	1.53	1.48	9.19 **	16.34 ***	4.11 *
		SD	2.28	2.45	2.38	2.26	2.57	2.44	2.31	2.20	2.25		G < B	C > A
叱責	0-12	M	4.04	4.44	4.24	4.37	4.79	4.59	3.51	3.83	3.67	10.44 **	63.01 ***	0.20
		SD	2.64	2.87	2.77	2.67	2.89	2.79	2.52	2.73	2.63		G < B	C > A
心理的 統制	0-12	M	2.37	2.60	2.49	2.44	2.74	2.60	2.25	2.36	2.31	3.96 *	7.71 **	0.93
		SD	2.38	2.49	2.44	2.43	2.45	2.44	2.31	2.54	2.43		G < B	C > A

注) C = Children, A = Adolescents, G = Girls, B = Boys.

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$.

社会的行動」は中程度の正の相関が示され ($r = .41$), 「自律性の尊重」と「向社会的行動」は弱い正の相関が示された ($r = .36$)。次に、「否定的養育行動」については「総合困難」, 「内在化問題」, 「外在化問題」との弱い正の相関が示された ($r = .35$; $r = .24$; $r =$

$.37$)。加えて, PBQと養育者の心理的柔軟性に関する相関係数を算出した。その結果, 「肯定的養育行動」は「養育者の心理的柔軟性」と弱い正の相関が示された ($r = .35$)。一方で, 「否定的養育行動」は「養育者の心理的柔軟性」と中程度の負の相関が示され

Table3 各変数の相関係数

	肯定的 養育 行動	否定的 養育 行動	肯定的 注目	ご褒美	温かさ	自律性 の尊重	体罰	叱責	心理的 統制
総合困難	-.252**	.348**	-.263**	-.072**	-.257**	-.233**	.284**	.272**	.340**
内在化問題	-.156**	.235**	-.169**	-0.03	-.180**	-.133**	.196**	.154**	.259**
外在化問題	-.280**	.369**	-.286**	-.098**	-.266**	-.270**	.296**	.316**	.331**
情緒の問題	-0.03	.204**	-.044*	0.01	-.054**	-0.03	.138**	.165**	.219**
行為の問題	-.243**	.350**	-.250**	-.093**	-.239**	-.211**	.297**	.284**	.318**
不注意・多動	-.247**	.303**	-.251**	-.080**	-.229**	-.254**	.232**	.272**	.269**
仲間関係の問題	-.214**	.186**	-.228**	-.052*	-.236**	-.186**	.184**	.093**	.209**
向社会的行動	.447**	-.165**	.442**	.245**	.411**	.355**	-.179**	-.081**	-.171**

** $p < .01$, * $p < .05$.

た ($r = -.49$)。以上のことから、概ね仮説通りの相関係数が算出され、PBQの構成概念妥当性が支持される結果となった。

親の養育行動の横断的影響（階層的重回帰分析）

次に、親の養育行動の上位因子を独立変数として、階層的重回帰分析を実施した (Table 4)。その結果、「内在化問題」を従属変数とした場合、子どもの性別と発達段階、および「外在化問題」を統制した上で、ステップ3に親の養育行動を投入した結果、有意ではあるものの増分妥当性がほとんど示されなかった ($\Delta R^2 = 0.00$, $p < .01$)。一方で、「外在化問題」を従属変数とした場合には、ステップ3で親の養育行動を投入することの増分妥当性が確認された ($\Delta R^2 =$

0.11, $p < .001$)。子どもの性別と発達段階、「内在化問題」の影響を統制した上で、「肯定的養育行動」からは弱い負の影響 ($\beta = -.22$) が示され、「否定的養育行動」からは弱い正の影響 ($\beta = .26$) が示された。次に、独立変数をPBQの各下位因子として同様の階層的重回帰分析を実施した (Table 5)。「内在化問題」は、有意ではあるものの増分妥当性がほとんど示されなかった ($\Delta R^2 = 0.02$, $p < .001$)。また、絶対値.20を上回る回帰係数を有する下位因子は示されなかった。次に、「外在化問題」は、他の変数を統制した上で、親の養育行動の下位因子を投入することの妥当性が示された ($\Delta R^2 = 0.12$, $p < .001$)。しかし、「叱責 ($\beta = .19$)」の影響が比較的大きかったものの、絶対値.20を上回る回帰係数を有する下

Table4 上位因子を用いた階層的重回帰分析の結果

	内在化問題			外在化問題		
	R^2	ΔR^2	β (Step 3)	R^2	ΔR^2	β (Step 3)
Step 1	0.00	0.00		0.02 ***	0.02 ***	
性別			-0.04 *			0.07 ***
発達段階			0.01			0.04 *
Step 2	0.27 ***	0.26 ***		0.27 ***	0.26 ***	
内在化問題			—			0.41 ***
外在化問題			0.49 ***			—
Step 3	0.27 ***	0.00 **		0.38 ***	0.11 ***	
肯定的養育行動			-0.02			-0.22 ***
否定的養育行動			0.06 **			0.26 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$.

Table5 下位因子を用いた階層的重回帰分析の結果

	内在化問題			外在化問題		
	R^2	ΔR^2	β (Step 3)	R^2	ΔR^2	β (Step 3)
Step 1	0.00	0.00		0.02 ***	0.02 ***	
性別			-0.04 *			0.08 ***
発達段階			0.03			0.03
Step 2	0.27 ***	0.26 ***		0.27 ***	0.26 ***	
内在化問題			—			0.42 ***
外在化問題			0.49 ***			—
Step 3	0.28 ***	0.02 **		0.39 ***	0.12 ***	
肯定的注目			0.03			-0.08 **
ご褒美			0.03			-0.01
温かさ			-0.10 ***			-0.07 **
自律性の尊重			0.03			-0.13 ***
体罰			0.01			0.05 *
叱責			-0.10 ***			0.19 ***
心理的統制			0.15 ***			0.05 *

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$.

位因子は示されなかった。

考察

本研究の目的は、肯定的養育行動と否定的養育行動という上位因子を含み、かつ、先述の系統的レビュー (Pinquart, 2017a, 2017b) の示す5分類に基づく下位因子を含む尺度である親の養育行動尺度 (PBQ) を作成し、信頼性と妥当性を検討することであった。加えて、親の養育行動が子どもの内在化問題と外在化問題に与える影響を検討することであった。分析の結果、PBQは7因子構造の下位因子(「肯定的注目」「ご褒美」「温かさ」「自律性の尊重」「体罰」「叱責」「心理的統制」)が示され、上位因子として「肯定的養育行動」と「否定的養育行動」を想定する構造的妥当性が示された。信頼性については、「自律性の尊重」の再検査信頼性が他の変数と比較すると低いものの、概ね高い信頼性が確認された。加えて、PBQの構成概念妥当性が概ね支持された。続いて、「肯定的養育行動」と「否定的養育行動」は外在化問題に横断的影響を与えることが示され

た。

探索的因子分析の結果、行動的統制は「肯定的注目」と「ご褒美」に分かれ、罰的統制は「体罰」と「叱責」に分かれることが示された。「肯定的注目」や「ご褒美」といった行動的統制、あるいは、「体罰」や「叱責」といった罰的統制を単独で測定できる下位因子は、本邦の先行研究には含まれていない(伊藤他, 2014; 松岡他, 2011)。これらの独立した下位因子を有することや独立した影響を検討できることはPBQの特徴である。次に、確認的因子分析では、7因子を想定した下位因子モデルや上位因子モデルの構造妥当性が確認された。先行研究(伊藤他, 2014)においても、下位因子モデルと上位因子モデルの存在が確認されている。各下位因子は具体的な行動を捉えられるという強みがあり、上位因子には全般的な行動傾向を捉えられるという強みがある。下位因子と上位因子の信頼性は概ね高い結果が得られた。しかし、「自律性の尊重」は内的整合性が高いものの、再検査信頼性が他の変数と比較して低い値が示された。このことから、「自律性の尊重」は一時的な安定性はあるものの、自然な時間の経過に伴って変化

する養育行動である可能性がある。今後は、下位因子と上位因子の時間的な安定性を踏まえた上で、どのように研究や実践で活用していくかについて議論が必要である。

子どもの性別と親の養育行動の関連については、男子を持つ親の方が、女子を持つ親よりも「否定的養育行動」が高いことが示された。先行研究(松岡他, 2011)においても、同様の傾向が示されている。男子は女子と比較して、行為の問題や不注意の問題などの外在化問題を多く示すことが報告されている(Moriwaki & Kamio, 2014)。次に、発達段階については、「肯定的養育行動」と「否定的養育行動」のいずれにおいても、児童を持つ親の方が、青年を持つ親よりも得点が高いことが示された。先行研究(伊藤他, 2014; 松岡他, 2011)においても、発達が進むにつれて養育行動が減少するという同様の結果が示されている。

上位因子を用いて横断的影響を検討した階層的重回帰分析の結果、「肯定的養育行動」と「否定的養育行動」は子どもの「外在化問題」に対して弱い影響があることが示された。一方、「内在化問題」には養育行動の影響が示されなかった。このことから、親の養育行動については、内在化問題よりも外在化問題に対してより影響を与える可能性がある。先行研究(伊藤他, 2014)においても、親の養育行動は内在化問題に関連する指標よりも、外在化問題に関連する指標と関連が強く、同様の結果が示されている。一方、下位因子を用いた分析の結果、内在化問題や外在化問題に対して横断的影響を与える特定の親の養育行動の存在は示唆されなかった。上位因子を用いた分析の結果を踏まえると、外在化問題に対しては、個々の養育行動の高低よりも、全体として肯定的養育行動が高く、否定的養育行動が低い状態が影響すると考えられる。

最後に本研究の限界と課題について述べる。第1に、親の性別(母親/父親)に応じた養育行動の検討を実施していない点がある。親の性別の違いにより、養育行動が異なる可能性も否定できない。第2に、PBQは回答期間が未設定であるという限界がある。例えば、中学生の子どもに対して回答を求めた場合、親が養育行動を評定する際に、過去の小学生時代を

想定した回答と現在の中学生時代を想定した回答が混在してしまう可能性は否定できない。第3に、本研究では内在化問題と外在化問題というネガティブな側面にのみ着目して検討を実施しているという限界がある。今後は、向社会的行動などのよりポジティブな側面にも注目して、親の養育行動が与える影響について検討を重ねる必要がある。第4に、本研究は変数間の関連を検討した横断調査であるという限界がある。各養育行動の変容が内在化問題や外在化問題の変容に影響するかについては、縦断調査や介入研究を通じて検討する必要がある。

謝辞

本論文の執筆にあたり、帝塚山大学の式部陽子先生には貴重なご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

引用文献

- Essau, C. A., Sasagawa, S., & Frick, P. J. (2006). Psychometric properties of the Alabama parenting questionnaire. *Journal of Child and Family Studies, 15*, 595-614.
- Fonseca, A., Moreira, H., & Canavarro, M. C. (2020). Uncovering the links between parenting stress and parenting styles: The role of psychological flexibility within parenting and global psychological flexibility. *Journal of Contextual Behavioral Science, 18*, 59-67.
- Goodman, A., Lamping, D. L., & Ploubidis, G. B. (2010). When to use broader internalising and externalising subscales instead of the hypothesised five subscales on the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): Data from British parents, teachers and children. *Journal of Abnormal Child Psychology, 38*, 1179-1191.
- 伊藤 大幸・中島 俊思・望月 直人・高柳 伸哉・田中 善大・松本 かおり・大嶽 さと子・原田 新・野田 航・辻井 正次 (2014). 肯定的・否定的養育行動尺度の開発—因子構造および構成概念妥当性の検証— 発達心理学研究, 25, 221-231.
- 岸田 広平・福山 裕三郎 (2024). 本邦の児童生徒における暴力行為といじめに関する親評定によるオンライン調査. 学校メンタルヘルス, 27, 236-240.
- Kishida, K., Tsuda, M., Waite, P., Creswell, C., & Ishikawa, S. (2021). Relationships between local school

- closures due to the COVID-19 and mental health problems of children, adolescents, and parents in Japan. *Psychiatry Research*, 306, 114276.
- 松岡 弥玲・岡田 涼・谷 伊織・大西 将史・中島 俊思・辻井 正次 (2011). 養育スタイル尺度の作成—発達的变化と ADHD 傾向との関連から— 発達心理学研究, 22,
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2024). 令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 文部科学省 Received September 7, 2024, from https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_1_2.pdf
- Moriwaki, A., & Kamio, Y. (2014). Normative data and psychometric properties of the strengths and difficulties questionnaire among Japanese school-aged children. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health*, 8, 1.
- 日本発達障害ネットワーク (2023). ペアレント・トレーニング実施における評価ツールの作成と活用に関する研究報告書. Received November 30, 2023, <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/001113438.pdf>
- Parent, J., & Forehand, R. (2017). The multidimensional assessment of parenting scale (MAPS): Development and psychometric properties. *Journal of Child and Family Studies*, 26, 2136-2151.
- Pinquart, M. (2017a). Associations of parenting dimensions and styles with internalizing symptoms in children and adolescents: A meta-analysis. *Marriage and Family Review*, 53, 613-640.
- Pinquart, M. (2017b). Associations of parenting dimensions and styles with externalizing problems of children and adolescents: An updated meta-analysis. *Developmental Psychology*, 53, 873-932.
- Yamada, T., & Fujii, Y. (2020). Reliability and validity of the Japanese-version Parental Acceptance Questionnaire (6-PAQ). *Child and Family Behavior Therapy*, 42, 258-267.
- (2024. 10. 2 受稿) (2026. 2. 24 受理)
(ホームページ掲載 2026年3月)